美談「米百俵」の誕生とその真実

－日本の教育近代化と「米百俵」の主人公・小林虎三郎の軌跡－

坂本　保富*

はじめに

明治維新の夜明けに勃発した戊辰戦争は、長岡藩を含めた奥羽列藩同盟側の無条件降伏で終結した。勝者である維新政府は、敗者である列藩同盟の諸藩に対して、厳罰をもって臨んだ。徳川家康の三河時代以来の重臣であった越後長岡藩の牧野家は、老中や京都所司代など幕府の要職を占めてきた名門の譜代大名であった。だが、敗戦後、賊軍の汚名を着せられた長岡藩は、廃藩だけは免れたものの維新政府の処分は厳しく、第12代藩主の牧野忠訓（1844－1875）は官位剥奪、隠居謹慎の処分を受け、禄高もまた従前の7万4千石から2万4千石へと大幅に減封された。維新政府軍との長岡城争奪を巡る激しい戦闘の結果、焼土と化した戦後長岡の人々の生活は、衣食住の全てにおいて困窮を極め、惨憺たる状態に陥っていた。このような物心両面にわたる極限状況の中で、郷土長岡の再生を託された人物は、他ならぬ佐久間象山門下の小林虎三郎（1828－1877）と三島億二郎（1825－1892）であった。長岡藩にあって、彼らは共に軽輩身分（小林家100石、三島家37石）の出身であったが故に、非常時ならではの大抜擢であった。

幼なじみで畏友の間柄にあった虎三郎と億二郎とは、幕末期の黒船来航以来、同じ象山門下の河井継之助（1827－1868）が、藩主の寵愛を受けて異例の立身出世を遂げ、120石の軽輩から藩の首席家老にまで駆け上ったのとは、全く対照的な青年期を送った。彼らは、江戸の象山塾に藩の公費で遊学中に、ペリー艦隊の浦賀来航という歴史的な大事件に遭遇した。当時、長岡藩第10代藩主の牧野忠雅（1799－1858）は、幕府の老中職にあった。この主君に対して、彼らは、相次いで恩師象山の説く横浜開港を建言して処罰を受け、地元長岡での蟄居謹慎を命じられたのである。長岡に帰藩した後の彼らは、藩政の表舞台に登場することもなく、不遇な生活を送っていた。だが、皮肉にも戊辰戦争の敗戦という非常事態は、日陰にあった両者を藩政の表舞台に登場させ、長岡復興の立役者に押し上げたのである。

長岡藩では、維新政府から戦争責任を問われて隠居謹慎を命じられた第12代藩主

＊　信州大学　全学教育機構　教職教育部　教授

牧野忠訓（1844－1875）の後を受けて、明治元年（1868）12月、新たに牧野忠毅（鋭橘、第11代藩主忠恭の第4子、1859－1917）が、第13代藩主を襲封した。いまだ10歳を迎えたばかりの幼君の誕生であった。だが、明治2年正月、薩長土肥の4藩連署による版籍奉還の建白書が提出されると、藩主に就任して半年も経たない同年4月、忠毅は、藩論に従って維新政府に版籍奉還を願い出て、新たに藩知事を拝命した。

維新政府は、戊辰戦争の終結と同時に、明治元年9月、旧藩職制の改革を求めて「藩治職制」を定め、全国の諸藩に布令した。これを受けて長岡藩も、翌年の明治2年8月、職制改革を実施し新たな職掌を定めた[1]。旧藩時代の家老職に相当する新たな職掌とされた「執政」には、藩主牧野家の縁戚（旧家老職）の牧野頼母（図書、1826－不詳）と三島億二郎が就任し、虎三郎は人材を育成し文武を振起する「文武局」の「総督」に任ぜられた。さらに、同年11月の第2次職制改革では、藩士の公選（入札）によって虎三郎と億二郎の両名が、牧野頼母と共に大参事に選挙され、維新政府から辞令を交付された[2]。これによって新生長岡藩は、旧主家筋の牧野頼母を中心に結束して幼君を支え、虎三郎と億二郎が長岡復興の実質的な責任者として藩政を担うこととなったのである。以後、象門畏友の二人は、焼土長岡の再生に向けて奔走する。が、生来、病弱な虎三郎に代わって、戦後長岡の救済方を維新政府に嘆願すべく、長岡と東京を往復して関係各方面に嘆願して回ったのは、年長の億二郎であった。もちろん虎三郎の方も、長岡復興のための具体的な自力更生策を、億二郎と共に立案し実施に移していった。

彼らが断行した戦後長岡の様々な復興策の中でも、特に注目すべきは、藩立学校の新設であった。虎三郎は、すでに幕末期の安政年間に、国家の富強治安の根本は人材の育成にあるとの教育立国主義をもって、論文「興学私議」を著していた[3]。それ故に彼は、戊辰戦後の長岡復興に際しても、学校建設による人材の育成こそが、全ての復興事業の基礎であると考え、廃墟と窮乏の直中にあって藩立学校の創設を最優先の課題とした。折しも明治3年（1970）5月には、長岡藩牧野家の分家である越後三根山藩（現在の新潟市）から救助米「米百俵」が送られてきた。藩政の最高責任者の一人であった大参事の虎三郎は、この「米百俵」を救助米として藩士家族に配分せず、断腸の思いをもって藩立学校の開設資金に組み込んでしまった。美談「米百俵」の誕生である。

以下の論攷は、美談「米百俵」が生まれるに至った歴史的経緯とその実際を解明し、もって美談「米百俵」の歴史的真実を明らかにすることを研究課題としている。はたして「米百俵」の美談は、いかなる歴史的経緯の下に誕生した物語であったのか、その内容はいかなるのもであったのか、そして美談「米百俵」の歴史的な意義とは何であるのか、等々の問題を、たしかな資料分析を通して明らかにしたい。筆

者は、先に公刊した拙著『米百俵の歴史学』（学文社、2006年）において、美談としての『米百俵』を歴史学的な観点から吟味・検討し、史実としての「米百俵」の世界を明らかにしたいとして、次のように述べた。本論文もまた、そのような問題意識に支えられた歴史研究の一端である。

史実「米百俵」において真に注目すべきこと、それは、有三の『米百俵』が描き上げた、あの象山門人の虎三郎を主人公とした感動的な世界とは異なる、新たな捉え方の提示である。本文の中でも詳しく触れたが、早くも戊辰戦争直後の明治二年には、虎三郎の発意と同門畏友である億二郎の奔走とで、市内の寺院を仮校舎に藩士子弟の教育を再開し、翌年の五月には新校舎が落成して、正式に藩立学校が開校した。実は、この厳粛な歴史的事実を、どのように解釈し、いかに意味づけるか、が問題なのである。これまでは、有三の『米百俵』に代表されるごとく、教育立国思想を掲げて一人立てる孤高の虎三郎にして初めてなしうる快挙として、彼の個人的な功績を讃え、彼を英雄視する理解がほとんどであった。それも一つの捉え方ではある。

だが、維新時における新政府の政策展開という日本近代史の観点から捉えると、同じ事実が全く異なってみえてくる。三根山藩から送られた「米百俵」を資（たすけ）として長岡藩が学校を建設したという史実は、維新政府が天皇制中央集権国家の形成を意図して展開した文教政策を受けて、不可避的に惹起された出来事であった、と理解することができるのである。すなわち、維新政府は、学校を通じて諸藩の領民を国家を構成する国民にまで教育することの緊要性を認識し、いわゆる「府県施政順序」を発令して、学校教育の実施を全国諸藩に命じた。そのような維新政府の御下命を受けて、長岡藩もまた、他事をなげうって廃墟の中で学校教育の再建を優先し、校舎を新築して新たな教育を再開しなければならなかった。したがって、史実「米百俵」の本質は、虎三郎が、歴史上における偶然の必然か、偶々（たまたま）、戊辰戦後の郷土長岡の復興を担わされたときに、維新政府の教育方針を自らの学問的な信念－彼が学んだ儒学の基本思想である教育立国主義－に基づいて主体的に受け止め、復興を担う人材育成のための学校建設を最優先するという大胆な決断と行動とに具体化した、という点にある。そのように捉えることの方が、はるかに自然であり妥当である。

しかし、だからといって、「米百俵」に関わる虎三郎の歴史的な功績や偉大さは、少しも失われはしない。彼が辿った高邁な教育的軌跡の全体をみるならば、いかに彼が日本の教育近代化に深く関わる重要な活動を展開して生きたか、が窺い知れるであろう。越後長岡という限定された狭い地域社会においてではなく、世界の中の日本の行く末を展望し、その日本の教育をいかに構築するか

という新たな枠組（パラダイム）からこそ、彼の教育的軌跡は理解され評価されるべきではないか。「米百俵」という出来事は、彼の教育的軌跡の全体からみれば、一つの断面に過ぎない。したがって、たとえ「米百俵」という出来事が無かったとしても、日本近代化に関わって展開された虎三郎の諸々の活動は、歴史的に大きな意義を有するものであり、決して看過されるべきものではない。[4]

（一）戊辰戦後における長岡藩の教育復興

(1) 藩立学校とその教育

長岡藩に藩士子弟の教育機関としての藩立学校、すなわち藩校が開設されたのは、幕府老中職を務めた第9代藩主牧野忠精（まきのただきよ）（1760-1831）の治世、文化5年（1808）4月のことであった。藩校の校名は、中国古典の名文「義を明らかにして徳を崇び、功に報ゆ」（書経）から「崇徳館（そうとくかん）」と命名されたとされる[5]。この藩校崇徳館は、戊辰戦争が勃発する明治維新までの160年余りの長きにわたって、長岡藩の人材養成機関として機能し、藩の内外に多くの傑物を輩出したのである。

ところで、江戸時代初期の寛永年間にはじまる藩校の創設は、明治4年の廃藩置県に至る約250年の間に、全国で280校余りを数える[6]。最も多くの藩校が開設されたのは、江戸後期の文化年間から天保年間の40年間（1804－1843）における72校であった。次いで天明年間から享和年間の23年間（1781－1803）の59校、さらに明治元年から同4年の明治維新期の4年間（1868－1871）の48校と続く[7]。したがって、文化年間に創設された長岡藩7万4千石の藩校崇徳館は、設立年代からみれば全国諸藩の中では平均的な開設であった。

儒教を思想基盤とする徳川幕藩体制下において、当然のことながら長岡藩の崇徳館もまた、儒学を学問教育の基本とした。しかし中国伝来の儒学とはいっても、仏教などと同様に、経典（四書五経）の解釈や意味づけを巡って、いくつもの学派に分かれていた。崇徳館の場合は、開校後しばらくの間、伊藤仁斎（1627－1705）を学祖とする古義学派（仁斎学派）と、それに対抗して荻生徂徠（1666－1728）が開いた古文辞派（徂徠学派）という二つの学派が併存していた[8]。明治に入って旧長岡藩から文部省に報告された資料には、「学校ヲ造築シ伊藤満蔵（古義派）秋山多門太（徂徠派）ノ二儒ヲシテ別ニ校長タラシム[9]」とあるように、藩校の内には二つの学派の校舎が独立して併存し、各々に教授の中から都講（とこう）（教授たちを統括する校長職に相当）が配置されていた。しかし、虎三郎が入校する天保年間の頃には、先の文部省報告書に「古義派ヲ廃シテ朱子ノ一派トナス[10]」とあるように、

秋山が辞任し、新たに幕府儒官で昌平坂学問所教授の佐藤一斎（1772－1859）の門下生である高野松陰（虎太、1811－1849）が都講に就任してからは、藩校における古文辞派の流れは朱子学派に取って代わられていた。したがて、藩校崇徳館は新たに古義学派と朱子学派の併存時代となり、天保年間に入校した虎三郎は、両方の学派の儒学を学んだことになる。さらに幕末期の慶応年間には、「慶応年間備前守牧野忠恭ノ代ニ古義派ヲ廃シテ朱子ノ一派トナス[11]」とあるように、古義学派を廃して朱子学派に統一された。慶応以前の幕末期に入学した生徒の回顧談には、入校当時の崇徳館の様子と自分が受けた教育が次のように述懐されている。

> 崇徳館の学統は古義派、朱子派に分れ、其教場は朱子派は階上にて遷善閣と云ひ、古義派は階下にて成章堂と称し、又遷善館に属する生徒の質問所を有斐軒、成章堂の方を琢玉斎と称し、館中一番良い所を撰んで孔子を祀り之を恭安殿と称した。崇徳館の先生には都講と助教とがあって、私共の生徒時代には遷善閣の都講が高野虎太サン、成章堂の方は平岡村之丞サンであった。（中略）都講は平日は教授せず月何斎と云ふ様に生徒から質問を受け都講の下の助教が毎日親しく教へる。助教の教へるのは主として素読であるが、其教科書は大学、論語、五経（「易経」「書経」「詩経」「礼記」「春秋」、筆者注記、以下もカッコ内の追記は同様の措置）、古文真宝（全20巻からなる中国古代の詩文集）等にて蒙求（全3巻からなる中国古代の児童教科書）に至りて止まる。（中略）学業の成績は出席日数を標準となし、会読、輪講其他を合せて一年千席以上とか、無倦怠とか云ふ成績を挙げたものは藩侯より扇子とか紙とかを賞与として賜はる。束修（束脩のこと）即ち現今の月謝は一年百文宛で、生徒の資格は当時士分だけに止まり、お足軽は之に与らなかった。[12]

上記の資料に「生徒の資格は当時士分だけに止まり、お足軽は之に与らなかった」と記されている通り、藩立の教育機関である崇徳館への入学資格には、藩士子弟に限るという厳しい身分的制限が設けられていた。だが、入学年齢や修了年限については、文部省への報告資料にも「生徒入学年齢且何課程ヲ了ハレバ退学セシムル等ノ制アルニ非ス[13]」とあるごとく、別段の規定はなかった。このような長岡藩校の入学や就学に関する規定は、近世の藩社会における人材養成機関として設立された藩校としては、決して特別な事例ではなく、全国諸藩の多く藩校と同様の学校であった。

(2) 戊辰戦争後における藩立学校の再開

奥羽列藩同盟に加盟して官軍と抗戦した越後長岡藩は、慶応4年（戊辰）5月の開戦から4ヶ月後、明治と改元される同年9月に無条件降伏した。この戊辰戦争の直後に、廃墟となった長岡藩の復興をめざして藩職制の改革が実施された。が、それに先立つ明治2年5月、虎三郎は、畏友の億二郎とはかって城下の寺院本堂（四郎丸昌福寺）を借り受け、これを仮校舎として藩士子弟の教育を再開した。藩校の再開である。仮校舎での教育再開を告げる次のような「触書」が、明治2年4月、藩庁から藩内に回付された。

> 文武ノ儀ハ、御手厚ニ御取立被遊度儀ニ候得共、御家中初御扶助モ不被為行届御場合、着時被為仕尊慮ニ候ニ付、当分経書教場四郎丸昌福寺御借受被成候事。来月朔日ヨリ勝手次第出席可被為候。武場ノ儀ハ追テ可申達候。(14)

こうして明治2年5月、長岡藩の教育は、寺院本堂を仮校舎として再開されたのである。当時の様子を、教員の一人として関わっていた西郷葆（1833－不詳、藩立国漢学校が明治7年に分離して新設された表町小学校の初代校長）は、次のように証言している。

> 戊辰兵燹（兵火）の後、長岡藩士の疲弊は其絶頂に達し、住むに家なく喰らふに食なき悲惨なる境遇に陥った。乍去斯る場合に於ても子弟の教育亦た忽諸（軽んじ疎かにする）に附すべからざるを自覚し、小林虎三郎、三島億二郎氏等諸先輩の唱導に依り、明治二年五月に四郎丸昌福寺に士族の子弟を集め学問を教ゆることとなった。教員は田中春回氏を筆頭として、私に大瀬虎治、田中登、大原蔵太、稲垣銕吉、伊地知涵、伊地知元造の八名で、生徒の内には渡辺廉吉、柳澤銀蔵、鬼頭悌二郎、波多野伝三郎、根岸錬次郎、仙田楽三郎氏もあった。能く記憶せぬが生徒の数は四五十名位で、教員の給料は多額の人が年給十二両、最低は十両位で、教授は毎日午前限りである。教員は藩庁の習慣にて名義は日勤であったけれども其実隔日出勤教授していた様だ。(15)

たしかに敗戦後の窮状の中で、他事を投げ打って教育を再開するという機敏な対応は、勇気ある措置であった。それは、幕末期の安政時代以来、教育立国主義を唱導した虎三郎が、人材育成の教育を再開することが長岡復興の優先課題であるとの強い信念を貫いた結果でもあった。このような彼の決断と実行とが、まさに美談「米百俵」が誕生する伏線となる教育的な出来事であったことは間違いない。だが、

寺院本堂を仮校舎として藩校教育を再開したこと、さらにその翌年には校舎を新築して新たな藩立学校を開校したこと、これらを、虎三郎個人の英断とのみ捉えて美談とすることは決して歴史学的な理解とはいいがたい。実は、戦後長岡における藩立学校の再開という教育施策それ自体が、近代統一国家の建設を急ぐ維新政府の教育政策に呼応した急場凌ぎの出来事であったのである。

長岡藩をはじめとする全国諸藩において、明治の御一新の後に展開された教育の新たな動向は、天皇制中央集権体制の確立を急ぐ維新政府の教育政策と密接に関わって展開されたものであった。勝者の官軍が組織する維新政府の御威光は絶大であり、これに逆らうことはできなかった。とりわけ官軍に抗して惨敗した幕府側の諸藩は、維新政府の政策展開には敏感であり、遺漏なき対応を迫られた。長岡藩の場合も然りであった。それ故に、長岡藩内で起こった出来事を理解する際に、維新政府の政策展開を主軸とした明治維新期の歴史的潮流を無視してしまっては、事実認識を基本とする歴史理解を歪曲してしまう危険性が生じてしまう。いかなる歴史的な出来事も、歴史的条件を捨象した真空パックの中では決して生まれない。すなわち、維新期の長岡藩に起こった史実「米百俵」に関わる教育的な出来事を、維新政府による国家教育の政策展開を無視して、単に長岡藩という閉じた地方世界で起こった先駆的な出来事して捉えてしまうこと、あるいは主人公である小林虎三郎という個人を顕彰する美談として喧伝してしまうことは、歴史的事実に違背する大いなる誤解を生むということである。そのような歴史理解を最も嫌ったのは、歴史学者でもあった虎三郎その人であったのではないか。

(3) 維新政府の教育構想と長岡藩の教育復興

欧米列強の植民地獲得の脅威にさらされた極東アジアの小さな島国の日本。維新政府にとっては、国家民族の独立体制を確保するためには、従来の地方分権を基本とする幕藩体制を、何としても中央集権を基本とする近代統一国家に変革することが喫緊の政治課題であった。そのためには、国家の構成基盤となる人民の国家意識の形成と富国強兵を担う人材の育成という教育課題が、維新政府の取り組むべき重要施策となった。

それ故に、教育政策を緊要な国策の一つと考える維新政府は、副総裁である岩倉具視(1825－1883)を中心に、明治の夜明けと共にその具体化に着手する。皇国の学としての国学をもって王政復古の精神と考える政維新府の岩倉は、早くも戊辰戦争が勃発した明治元年の2月には、腹心の玉松操(1810－1872)、平田篤胤の養嗣子である平田鎮胤(かねたね)(1799－1880)、それに矢野玄道(はるみち)(1823－1889)という平田派の国学者3名に、「今般学校御取立ニ付制度規則等取調申付ク」として「学校掛」に任じ、学校制度の取り調べを

命じた[16]」。さらに、その翌3月には、後の文部省に当たる教育行政府の役割も担っていた維新政府の教育機関である昌平学校に、新たに「府県学校取調局」を設置して全国府県への小学校の設置と監督の権限を与え、「府県学校取調御用掛」を任命して配置した[17]。全国的な規模での学校教育の開設を企図して準備を整えてきた維新政府は、いまだ戊辰戦争が終結する前の明治2年2月には、旧来の幕藩体制を改めて近代的国家としての中央集権体制を構築すべく、維新政府直轄の府県が早急に取り組むべき緊要な政策課題として、全13項目からなる「府県施政順序」を発令した[18]。実は、その中には、国民教育を担う小学校の設置を義務づける「小学校ヲ設ル事」という一項が盛り込まれていたのである。その内容は次のようなものであった。

一、小学校ヲ設ル事
専ラ書学素読算術ヲ習ハシメ願書書翰記牒算勘等其用ヲ闕サラシムヘシ。
又時々講談ヲ以国体時勢ヲ弁ヘ忠孝ノ道ヲ知ルヘキ様教諭シ風俗ヲ敦クスルヲ要ス。最才気衆ニ秀テ学業進達ノ者ハ其志ヲ遂ケシムヘシ。[19]

上記のような維新政府の教育指針は、あくまでも直轄地である府県（旧幕府の領地と戊辰戦争の没収領地）に対する布達であった。だが、いまだ廃藩置県の前で、直轄地ではなかった全国の諸藩に対しても、維新政府の御意向は絶大な影響力を与えるところとなった。ましてや戊辰戦争で政府軍と抗戦して逆賊となった奥羽列藩同盟の諸藩にとっては、維新政府の打ち出す新政策を真摯に受け止め、進んで実行することが求められたといえる。

一体、何故に四民平等の小学校を開設しなければならないのか。維新政府の意図は、上記の布令の中の「講談ヲ以テ国体時勢ヲ弁ヘ忠孝ノ道ヲ知ルヘキ様教諭シ風俗ヲ敦クスル」という文面によく表現されていた。すなわち、旧藩の領民をして国体忠孝を体得した国家の人民にまで教育すること、このことが身分的制限を廃して全ての人民児童を入学対象とする小学校を全国に設立する目的であった。実は、このような小学校の設立条文の前項には、「制度ヲ立風俗ヲ正スル事」との一項があり、そこには「善ヲ勧メ悪ヲ懲シ華美奢侈ヲ禁ジ倹素質朴ヲ尚ヒ人民ヲシテ各所ヲ得其業ヲ勉メシムルヲ要ス、是繁育ノ基トス[20]」と、人民教化の重要性が説かれいていたのである。そこに、維新政府が望む国家の理想的人民像とその実現をはかるための教育指針を窺い知ることができる。

さらに維新政府は、その翌月の3月には、先の「府県施政順序」とは別に、戊辰戦争で朝敵となった越後を含む東北諸藩に対して、速やかに小学校を設けて人民の教化に着手すべしとする、次のような内容の布達を改めて発令したのである。

庠序（学校）ノ教不備候テハ政教難被行候ニ付、今般諸道府県ニ於テ小学校被設人民教育ノ道洽ク御施行被為在度、思召ニ候間、東北府県速ニ学校ヲ設ケ御趣意貫徹候様尽力可致旨被仰出候事[21]

上記のごとくに維新政府は、戊辰戦争の最中において、近代日本を構成する一般人民（国民）の教育を重視して府県学校取調掛を任命し、全国の府県に急ぎ小学校を設立すべき旨の布達を発令した。特に維新政府に抗した奥羽列藩同盟の諸藩に対しては、速やかに小学校を設置して一般人民の教育を徹底するよう、重ねて督励したのである。

全国の府県や諸藩は、上述のような維新政府の発令した人民教育の普及徹底に関する教育政策を受けて、小学校を開設し一般人民の教育を実施することを急ぎ求められた。このことが、戊辰戦争後の越後長岡に、美談「米百俵」が誕生することになる重要な歴史的背景となっていたのである。すなわち、美談「米百俵」を理解するに際しては、教育によって全国諸藩の領民を近代国家の人民にまで啓蒙し教育しようとする明治国家の教育政策が、日本近代史の幕開けの時期に強力に推進されていたという歴史的事実を認識することが不可欠である、ということである。実は、長岡藩が戊辰戦争の敗戦直後に、長岡復興の重要施策として市内の寺院本堂を仮校舎として急ぎ藩士教育を再開したのは、維新政府が全国の府県に小学校の開設を督励する布令を発した直後のことであった。たしかに藩校教育を再開するに際しては、教育立国主義を掲げる虎三郎の貢献を無視することはできない。だが、それは虎三郎個人の意志や信念によるものではなく、維新政府の教育施策という国家の御意向に対応した決断と行動とであった、という歴史的事実を捨象してはならない。「米百俵」の美談を生み出すに至った、戊辰戦後の長岡復興へ向けての教育動向は、維新政府の教育政策に機敏に対応した虎三郎や億二郎など、藩当局者たちの奮闘努力によって展開されたものであった、といわなければならない。実は、上述のような美談「米百俵」を生んだ歴史的経緯を簡潔に記録した史料がある。それは、藩立国漢学校の後身である阪之上小学校の校長を歴任した湊八郎という人物が書き残した、明治10年（1877）に同校が新築移転した際の撰文「阪之上小学校造営の記」である。

恭しく惟るに明治聖上（明治天皇）の御宇（御治世）の始め、首として諸藩県に詔して学を立たしむ。蓋し人才（人材）は国の本にして、学を立つるは即ち国の本を培う所以なり。我が小区嚮に兵燹（兵火）の余を承け、闔区（長岡）凋残（枯れ残る）す。東号西呼するも、旦夕の薪米（薪と米）に是れ苦しむ。未だ学を興すに暇あらざるなり。旧藩の知事公、及び旧参事小林・

三島諸君等、切に聖謨（天皇の統治方針）に称う無きを憂い、慨然として非常節減の令を布く。一朝に一餐（飲食）、一葛一裘（裘葛、冬のかわころも）のみにし、闔藩凍餓（長岡藩が凍え飢えること）を忍び、以て文武の両場を置き、頗る士風を督励す。(22)

上記の史料は、「天皇親政の詔」（明治 2 年布告の「府県施政順序」）を受けて、戊辰戦後の長岡復興を担った藩執政の虎三郎や億二郎たちが、焼け野が原となって塗炭の生活苦に喘ぐ中で、万難を排して維新政府の布令「小学校ヲ設ル事」を実現しなければならないと意を決し、美談「米百俵」の誕生舞台となった藩立の国漢学校を開設するに至った歴史的経緯を、極めて端的に表現した名文である。藩政を担う最高責任者の虎三郎や億二郎の場合はもちろん、長岡藩政に関わる人々にとって、維新政府の「小学校ヲ設ル事」という布達（府県施政順序）は、まさに衣食を絶ってまでも遵守しなければならない「天皇親政の詔」とも呼ぶべき、絶対服従の御下命として受け止められたのである。

以上のような「府県施政順序」や東北諸藩に対する「達」にみられる維新政府の人民教化を意図した教育政策の展開こそが、戊辰戦後の混乱と困窮の渦中にあって、なおも長岡藩が明治2年5月に城下の寺院本堂を仮校舎として急ぎ学校教育を再開したこと、さらに翌3年5月には支藩の三根山藩から恵送されてきた「米百俵」を開校資金に組み込んで新たな藩立学校を開設したこと、などの直接的な契機となったものであった。ここにこそ、長岡藩における国漢学校開設の歴史的な契機や教育史的な意義もあった。このような歴史的事実を無視して、救助米である「米百俵」を学校建築資金に充当して新たな藩学校を開設したことを、単純に美化し喧伝することはできない。

（3）救助米「米百俵」と藩学校の新築

三根山藩が「米百俵」を恵送

戊辰戦争の後、長岡復興の重責を担わされた虎三郎や億二郎たちの東奔西走の結果、長岡藩の教育は仮校舎をもって再開された。さらに彼らは、翌年の明治3年6月には新校舎を建設して学校備品を整備し、従来の藩校における武士階層に限定した身分制社会の旧教育を改め、藩内領民の全ての児童を入学対象とした新たな藩立学校として再出発させた。美談「米百俵」を生み出す教育的世界の誕生である。

維新政府から「府県施政順序」や東北諸藩に対する「達」が相次いで発布されて以後、長岡藩の寺院を仮校舎とする旧態依然の藩校教育の再開では、とても維新政府が求める新時代の学校教育を満たすことはできない。このことの重大性を、最も

痛感していたのは、虎三郎をはじめとする新生長岡藩の首脳陣であった。いかにして長岡藩が、維新政府の教育指針に叶うような全ての領民児童を対象とした四民平等の学校教育を実現するか。急を要する難題であった。第一に学校建設の資金の問題である。戊辰戦争前の借財と戦費による膨大な借金財政に加え、新政府によって藩収入の財源となる禄高が大幅に削減された財政破綻の状態で、いかにして多額の学校建設資金を捻出するか。教育立国主義を掲げる虎三郎たち藩首脳とっては、長岡藩が維新政府に抗した逆賊であったが故に、殊の外、維新政府の打ち出す教育政策には神経を尖らせ、遺漏なき万全の対応が求められた。だが、領民児童の全てが通う学校を新設することは、教育立国精神による長岡復興の実現を希求する虎三郎の基本方針と、決して矛盾するものではなかった。虎三郎たちにとって、維新政府の要求に応える形で長岡復興の人的基盤を形成することは、取りも直さず教育立国主義の具体化であった。それ故に虎三郎たちは、総額 3 千両といわれる多額の学校建設資金を、困窮する藩財政の中から何としても工面しなければならなかったのである[23]。

そのような苦渋の選択を迫られていた折りに、牧野家の分家である越後三根山藩から戦災見舞いの「米百俵」が送られてきた。明治 3 年（1870）5 月のことであった。だが、戦後復興を担った長岡藩大参事の虎三郎は、三根山藩から送られてきた救援米を食糧難に苦しむ藩士家族に分配せず、学校の開設資金に充当してしまったのである。このことの歴史的な経緯が、虎三郎校長の下で新築開校した国漢学校の教員を勤めた人物の回顧談「西郷葆翁談」には、次のように記録されている。

> 維新匆々の際なり又教授も不慣にて殆んど学校というべきものではなかったが、大参事たりし小林虎三郎氏は、大にこれを改良して完全なる教育を子弟に施さんものと考慮された。偶ま明治三年に三根山藩士族より御見舞として、長岡藩士族へ米百俵を贈与し来たった。当時、戊辰戦乱の後を承け闔藩〔長岡藩〕の疲弊言語に絶したるより、士族多数の意向は、各自にこれが分配を希望したるも、独り小林氏は青年の前途を憂慮し断然衆議を排し自説を主張し、該米を以て学校資金となし、国漢学校を建設するの議を定められた[24]。

この「西郷葆」という教員の証言は、まさに有三の戯曲『米百俵』が描いた美談の原型であった。虎三郎の教育信念が貫かれ、救援米が学校建設資金に充当されたという談話の信憑性を裏付けるべく、談話者である西郷自身が　、「これに就いては明治三年五月七日附を以て士族一統への布告がある」として示した史料的根拠が、次に掲げる長岡藩の公文書史料であった。

士正

三根山藩士族より、当藩士族へ、此節の見舞として百俵米贈与有之、然る処、士族給与米の儀は三月中より面扶持（家禄ではなく、家族の人数によって与えた扶持米）に候へば、辛くも目今の凌は相成候筈に付、右百俵を以て文武両場必要の書籍器械の費に充候ば、闔藩（長岡藩）士族、両道稽古の一助にも相成、即ち三根山士族の厚意に戻らざる儀と評決いたし、其段取計候間此段為心得一統へ可有布告候也

五月

士族事務総裁[25]

以上の史料によって、三根山藩から送られた「米百俵」が、戦後復興を担った藩大参事の虎三郎や億二郎など長岡藩当局者の基本的な施政方針であった、「目今、藩計極々窮蹙（困苦の極み）ニハ候え共、文武ノ儀ハ一日休業候えハ、後来藩勢振興一日ノ遅延を引起し候[26]」という教育立国主義の観点から、食糧難に苦しむ藩士家族への生活救援米としては分配されず、長岡復興の長期的な展望に立って、そのために最も必要な人材の育成を担う学校関係の費用に充てられたということは、疑いえない事実である。だが、換金された「米百俵」の代金は、270 両前であった[27]。学校新築の資金には、ほど遠い金額である。実は、三根山藩から恵送された「米百俵」の他にも、学校新築経費の一部として提供された資金があった。「米百俵」が送られてきた直後の「明治三年六月十二日」の長岡藩史料には、「従五位様（旧長岡藩第十三代藩主の牧野忠毅、通称は鋭橘）ニ於ても、此段深く御憂慮被為在候より、御家禄之内より御出費ニテ、国漢学校建設ニ相成[28]」とあり、さらに同じ月の別の藩史料には「知藩事家、御家禄の内より御出費にて、国漢学校建造既ニ成功ニ至り、当十五日開校ニ相成候[29]」と記されている。長岡藩旧主家の牧野家が、藩費から宛がわれている家禄の中から学校新築資金の一部として提供した拠出金のことであった[30]。しかし、これを加えてもなお、学校新築に必要な資金の総額からみれば、僅かな金額にしかならなかった。有三の戯曲『米百俵』に「食えないから学校を建てるのだ」と描かれたように、三根山藩から送られた「米百俵」だけで、学校の校舎新築が実現したわけではなかったのである。

救援米「米百俵」の使途

それでは、三根山藩から送られた救援米「米百俵」の代金は、一体、どのように使われたのか。もちろん、学校の開設資金の中に組み込まれたことは間違いない。だが、前述のごとくに学校建設に必要な資金の総額は、3 千両という膨大な金額であった。「米百俵」の換金や旧藩主の牧野家からの援助金では、とても賄える金額

ではなかった。

したがって、学校建設資金のほとんどは、維新政府の小学校設置に関する督励を厳粛に受け止めた虎三郎たち藩首脳が、財政窮乏の中から苦心惨憺して捻出したもの、と理解するのが妥当である。このことは、三根山藩から「米百俵」が送られてきた「明治三年五月」という日付と、学校が新築落慶して開校式を迎えた「明治三年六月」との間隔が1ヶ月余りしかなかったという時間的制約からも明らかである。この少ない日数では、とても学校建築に必要な工期を満たすことはできない。それ故に、学校の建築工事は、三根山藩から救援米「米百俵」が送られてくる前に着工されていた、とみるのが妥当である。実は、美談「米百俵」の理解に関わる上述のような時間的経過を踏まえて、国漢学校の建設経緯を矛盾なく説明した人物が、地元長岡にいたのである。労作『三島億二郎伝』や大著『長岡の歴史』（全5巻）等の学術的な研究書を多数刊行し、長岡の近代史研究の泰斗と評してもよい今泉省三(1905 − 1979)が、その人である。彼は、次のように述べている。

> 校舎にあてられた昌福寺は、あくまでも当座の間にあわせの仮校舎だ。そのうえ書籍はもとより器具調度とて満足のものがなく、その不備をかこっていた。機も熟して、翌三年早々、阪之上町二七番地、いまの大和長岡店のところに、演武場と学堂の新築にかかり、四月二十二日、演武場が開所し、六月十五日には国漢学校を移転開学し、同時に洋学局・医学局を設けた。[31]

上記のような今泉の記述を裏付ける資料的な根拠としては、藩政庁が明治3年6月12日に発令した開校式を告げる公文書「触書」があり、そこには「国漢学校建設ニ相成、来ル十五日開校ニ候[32]」という開校式の期日を告げる記載が認められているのである。

以上のような諸史料を総合的に勘案すると、明治3年5月に三根山藩から救援米「米百俵」が長岡藩に送られてきたが、それは学校の新築資金に使われたのではないことがわかる。「米百俵」が送られてきたときには、すでに藩の財政的な措置が講じられて、すでに学校の新築工事は着工され、しかも落成間近であった。建築資金の財政的な裏付けなくしては、学校の新築工事を着工することはできないからである。

それでは、270両前後で換金されたといわれる「米百俵」の代金は、一体、どのように使われたのか。次の史料は、虎三郎と共に藩大参事として国漢学校の開設に尽力した億二郎の日記に記された「米百俵」の使途に関わる部分である。

五月二十二日

三根山知事家より御到来米、代金之内百両、文武入用ニ御出被下候分配当

二十両　国漢　　二十両　兵

二十両　武場　　二十両　医

二十両　洋

五月二十七日

二十八日立、松五郎江二百両遣ス、峰山（三根山）米代金ニて書籍之料となす也、他百両可遣、是ハ武場道具之料也、差支故後組ニ致候[33]

上記の内容を裏付けるたしかな史料として、億二郎の日記が書かれる前の明治 3 年 5 月 7 日付で藩庁から士族一同に宛てた、次のような布告「三根山藩士から見舞いの米百俵の使途につき達し」がある。

三根山藩士族より当藩士族へ、此節の見舞として百俵米贈与有之、然る処、士族給与米の儀は三月中より面扶持に候へば、辛(から)くも目今の凌(しのぎ)は相成候筈に付、右百俵を以て、文武両場必要の書籍器械の費に充候へば、闔藩(こうはん)（長岡藩）士族両道稽古の一助にも相成、即ち三根山士族の厚意にも戻(もと)らざる儀と評決いたし、其段取計候間、此旨為心得一統へ可有布告候也

（明治三年）

五月　　士族事務総裁[34]

以上のような億二郎日記や藩庁布達などの諸史料を総合的に勘案すると、三根山藩から送られてきた救援米「米百俵」の代金は、学校本体の建築費用ではなく、校舎の建築が完成した後に、開校後の教育に必要な書籍や備品の購入費に充てられた、とみて間違いないであろう。実は、上述のような「米百俵」の使途に関する理解を最も早くに示したのが、前述の今泉省三であった。彼は、三根山藩から贈与された「米百俵」の使途に関して、山本有三の戯曲『米百俵』に描かれたような、藩立国漢学校の建設資金に充当されたという単純な見解とは異なる、次のような極めて妥当な解釈を示していたのである。

三根山藩からもらった米そのままでは学校の経費に組みいれるわけにはいかない。ただちに換金された。当時、米一斗七、八升で金一両の相場である。四斗七升いれ百俵でおよそ二百七十両余になる。とりあえずこのなかから百両を割(さ)えて国漢学校・演武場・洋学校・兵学校・医学校へそれぞれ二十両ずつを按分(あんぶん)した。この決定は五月二十二日になされたが、（中略）要するに松五郎へ二百両を預けて書籍を購入させ、別に百両は演武場の道具を買う資にあてると

いうことで、三根山からの米代金に牧野家が多少充足して文武両場の経費にあてたのである。(35)

三根山藩から送られた「米百俵」によって国漢学校が建てられたのではなく、学校本体の建築に要する多額の費用は逼迫する藩財政の中から捻出されたものあったこと、「米百俵」の代金は開校後の教育に不可欠な書籍や備品の購入費に充当されたこと、これらのことは疑い得ない歴史的事実とみてよいであろう。

しかしながら、「米百俵」が学校開設資金の総額からみて、いかに少額であったとしても、その日の空腹をも満たすことのできない戊辰戦後の困窮の中で、それを救助米としては配分せず、長岡復興を担う人材育成のための学校開設資金に組み込むという虎三郎たちの勇気ある決断は、長岡の人々をして敗戦の絶望から復興の希望へと意識の転換を促すに足りる、実に衝撃的な出来事であったといえる。三根山藩から送られた「米百俵」は、長岡復興の起爆剤となり、単なる経済的な価値を超えて、計り知れない精神的な価値をもたらしたということである。たかが「米百俵」、されど「米百俵」。ここにこそ、史実「米百俵」の美談としての歴史的な意味があるのではなかろうか。

国漢学校の教育精神

明治 3 年 6 月 15 日、虎三郎たち長岡藩の人々の悲願であった国漢学校の開校式が、旧藩主の臨席をえて盛大に挙行された。当日の様子を、入学生徒として列席していた生徒は、次のように記録している。

> 国漢学校の始めに開校式の様な事があった。時の藩知事即ち殿様が御臨席になって、小林虎三郎サンが大学の講義をされた。殿様から二三間の前に藩の重立(おもだち)初め綺羅星(きらぼし)の如く居並ぶ処に、髭(ひげ)ムシャムシャの小林サンが裃を着けて、荘厳なる御前講義を試みられたのは、如何にも偉観を極めたもので、今猶ほ眼前に彷彿たるの想いひがする。(36)

もちろん、国漢学校の初代校長に就任したのは虎三郎であった。彼は、新築なった開校式の晴れ舞台に立ち、旧藩主で長岡藩知事の牧野忠毅(ただかつ)をはじめ藩の重役たちが居並ぶ前で、新入生に対して、学問することの根本目的は「修身斉家治国平天下」(身を修め家を斉(ととの)えれば国は治まり天下は平らかとなる)の実現にあることを説いた、漢学の古典『大学』の講義を披瀝したのである。儒学の根本教材である「四書」の中の一書『大学』は、中国儒教の学問論を代表する名著である。そこに説き示された学問の世界は、まさに恩師象山の思想「東洋道徳・西洋芸術」を継承

し実践する虎三郎自身が探究してやまない、教育の理想世界であった。廃墟の中から長岡復興の源泉となる国漢学校の開校式を迎えた虎三郎の胸中に去来するものは、一体、何であったのか、察するに余りある。彼は、学問論を説いた中国儒教の古典『大学』の一言一句をもって、新生なった国漢学校の育成すべき真の人材とは、一体、いかなる人間であるのかを開陳（かいちん）した、とみてよい。この初代校長の開校式での御前講義は、その後の国漢学校の教育指針となり、長岡の復興と更なる発展の礎となったであろうことは疑い得ないところである。

ところで、財政難の中で総額3千両といわれる多額の建築費を投じて落成した国漢学校は、平屋建ての木造建築で、6つの教室とその他の部屋からなる文学校舎と武道鍛錬の演武場からなっていた。

藩立学校の校名は「国漢学校」

新築校舎をもって開校した藩立学校は、「国漢学校」と命名された。同校の教育内容を表す単純明快な校名である。旧来の「崇徳館」と呼ばれた藩立学校は、徳川時代の儒教を学問教育の基本思想とする身分制社会の学校であった。それ故に、入学資格を藩士子弟に限定し、教育内容も儒学を専らとした。だが、新たな藩立学校として開校された国漢学校は、国民形成を緊要課題とする維新政府の教育政策を受けて設立された新時代の学校であり、教育の内容も刷新された。すなわち藩校以来の伝統的な漢学（儒学）の他に、新たに国学（皇学）が導入され、国漢両学を兼学する学校に生まれ変わったのである。国漢学校という校名は、新しい藩立学校の性格と内容を端的に表現するものであった。

一体、何故に旧来の漢学一辺倒の教育内容を改め、国学が加えらたのか。理由は簡単明瞭である。それは維新政府の思想基盤による変化であった。儒教思想を基盤とする徳川幕藩体制を打倒した維新政府は、天皇制を基本とする近代統一国家の構築を目指していた。徳川幕府を倒し天皇を頂く王政復古の原動力となった思想は、皇国の学としての国学であった。明治維新期における国学の勢力は、旧来の儒学や新興の洋学を圧倒した。維新政府の後ろ盾をえた国学の威勢を天下に示す出来事としては、全国を吹き荒れた廃仏毀釈の運動を想起すれば足りるであろう。

維新直後の新政府は、旧来の徳川幕藩体制を支えた儒学や欧米化としての日本近代化を推進する洋学よりも、倒幕思想としての有効性を発揮した国学を重視し、政府関係の要職に国学者を積極的に採用した。教育面においても国学の影響力は大きく、国学を抜きにして近代日本の教育制度を構想することはできなかった。すなわち、国民形成と人材育成に関わる教育関係においても、国学重視の政策展開が顕著であった。明治元年（1868）2月、維新政府の取るべき学校教育政策を調査・立案する「学校掛」に採用された玉松操、平田鐵胤（かねたね）、矢野玄道（はるみち）の3名は、いずれも政府

参与の国学者であった。彼らが政府に提出した学校制度「学舎制」では、国学、漢学、洋学の 3 学を網羅していたが、そこで特に重視されたのは国学であった。旧来の儒学を学問教育の基本とする幕府諸藩の学校では、儒学の開祖としての孔子像が学神として祀(まつ)られていた。だが、「学舎制」では「祭神を異国に求めずに我国の神を祀ること[37]」とされた。「米百俵」を送った長岡藩牧野家の分家である越後新潟の三根山藩（明治 3 年 9 月に峰岡藩と改名、1 万 1 千石）でも、藩校入徳館では、創立以来、「聖像」（孔子像）を学神として安置してきたが、明治 3 年 5 月には新たに「神壇」を設けて神道による祭儀を行った[38]。地方の小藩にまでも国学の勢力が及んだことを物語っている。

東京遷都を直前に控えた明治元年 9 月には、「大学校御取立被遊天下ノ人才ヲ集メ文武共盛ニ被為備程[39]」との趣旨で、維新政府の行政官より「皇学所」と「漢学所」を京都に創設する旨の御沙汰が発せられた。そこに示された 7 ヶ条からなる「規則」の前 3 ヶ条は、次の通りであった。

一、国体ヲ弁シ名分(めいぶん)ヲ正スヘキ事
一、漢土西洋ノ学ハ共ニ皇道ノ羽翼(うよく)タル事
　但シ中世以来武門大権ヲ執リ名分取違候者数多ニ付向後屹度(きっと)心得ヘキ事
一、皇学漢学共ニ是非ヲ禁シ着実ニ修行文武一致ニ教諭致ヘキ事[40]

維新当時は、近代日本の思想的な主導権を巡って、国学、漢学、洋学の三学問が鼎立して競い合った。だが、維新政府の依って立つ思想的な立場は、国学であった。皇国の学たる国学が絶対的な優位を占めていたのである。天皇を頂点とする近代日本の構築を目指す維新政府は、国学を国家国民の精神的な主柱に据え、それを鳥の二枚の羽のごとくに羽翼するのが旧来の漢学と西洋日新の洋学という構図を描いていた。そのような皇国体制を整えるべく、明治元年 12 月、維新政府は太政官布告もって「皇学所」の開校を告げた。その前文には、皇国の学としての国学を振起し勉励すべきことが次のように記されていた。

近来皇国ノ学相衰ヘ外国ヘ対シ候テモ不都合ニ付今般更ニ皇学盛大ニ御振起(ごしんき)被遊度思召(おぼしめし)ニ候間各御一新ノ御趣意ヲ奉載(ほうたい)シ異日国家ノ大用ニ相立候様一同奮発勉励致ヘキ旨御沙汰候事[41]

以上のように維新当初の日本は国学全盛の時代であった。教育政策の面でも国学の教育が、漢学や洋学にも増して奨励されたのである。維新政府の国学を重視する

教育政策は、全国諸藩の藩校教育にも大きな影響を及ぼし、多くの藩校では皇学所や国学所を新設し、あるいは国学関係の学科を新たに開設していった[42]。藩校教育への国学の浸透は、一般人民の教育を担う小学校の教育内容にも及び、旧来の漢学と共に国学の教育が強調された。それ故、明治3年6月に新築開校された長岡藩立の国漢学校も、旧来の藩校崇徳館時代の儒学一辺倒の教育を改め、漢学と国学の両学問を教育内容とすべく、校名が「国漢学校」と命名されたのである。校名に「国漢」を冠する藩立学校は他に見当たらないが、国学を藩立学校の教育に導入するのは維新期の時代思潮であった。長岡藩が新築開校した国漢学校の場合は、維新期の教育状況を最も端的に表現した校名であったといってよい。生徒として国漢学校の開校式に臨んだ渡邊廉吉（1854 － 1925、明治大正時代に行政裁判所評定官として活躍した法制学者）は、新生なった国漢学校で受けた教育の内容を、「国漢」という校名の意味から説明して、次のように述べている。

> 国漢学校の教育は、崇徳館とは大に内容を異にし、国学と漢学とを併せ教授すると云ふ点に、頗る進歩の跡が見える。従来、崇徳館の教育は、凡て漢学で漢土の事のみを教へてあつたから、日本び臣民でありながら日本の国体等の事も分らなかつたのであるが、国学を併せ教ゆるに至て従来の欠陥を補ふこととなつた。而して単に国学と云ふも仮名交りの文章を読ませるのでもなければ、又和文和歌を教ゆるのでも無い、矢張り漢文を以て国家の歴史、制度等を学ぶと云ふ遣方である。之と同時に世界の出来事、凡ゆる科学的の事をも研究させる。日本の歴史、制度の教授に用えた重なる教科書は、大日本史、日本外史、漢学に於ては経書は勿論、史類等にて、尚ほ科学的の方面に於ては漢文で書いた地球説約（地理書）、窮理書（物理書）、博物新篇其他技術に関するもの等で、全く教育の方針を一変したものである。[43]

領民子弟に開放された国漢学校

明治4年（1871）7月には廃藩置県が断行された。これによって徳川幕藩体制は、名実ともに終焉を迎えたのである。ところで、その前年に新築開校された国漢学校は、正真正銘の藩立学校であった。江戸時代に創建され維新期まで存続した藩立学校の崇徳館もまた、同じく藩立学校であった。が、同校は、身分制社会を反映して入学対象を武家の子弟に限定していた。しかし、国漢学校は、同じ藩立学校でありながらも入学者の身分的制約を撤廃し、藩内領民の全ての子弟が入学して学ぶことのできる学校であった。従来の「米百俵」の理解では、この点が、教育立国を説く虎三郎の先駆的な功績として高く評価されてきた。例えば松本健一『われに万古の心あり』では、次のように述べられている。

国漢学校は、（中略）はじめは藩校の崇徳館にかわる、それも士族ばかりでなく町人も農民も入れる、開かれた学校として創立された。これは、重ねていうが、虎三郎の思想によるものであった。かれの田中春回に宛てた手紙には「小学は貴賤賢愚の別なく皆入るべき所」とあったし、三島億二郎に宛てた手紙には「兎角諸旧藩の風習にて、平民教育に心を用いず、士族而已（のみ）に教育費用を掛け」とあった。それは、虎三郎の思想がもともと、「富強の本ただ人民の知識を開く外なし」というものであり、そのためにはまず小学校の教育制度改革から始めなければならない、と考えていたことを示している。[44]

教育における身分的な制限や差別を撤廃して、日本国民の全てに小学教育を施すべきであるとする思想は、すでに述べたように虎三郎の恩師である象山が、早くもアヘン戦争直後の天保時代から強調していた教育思想であった。国民皆学の思想は、少なくとも黒船来航後の幕末期においては、多くの開明的な知識人に共有される教育認識となっていたのである。象山門人の虎三郎も、その一人であった。明治維新の折りには、近代日本の構築を担う維新政府も、国是とする富国強兵、殖産興業の人的基盤として国民皆学を重視し、その実現を期して欧米型小学校の普及徹底を急務としていた。

したがって、身分的差別を撤廃して、全ての人民子弟が等しく小学教育を受けるべきであるとする教育認識は、維新政府の首脳陣には等しく共有されていたのである。例えば幕末期に渡英経験した若き開明官僚の伊藤博文（1841 － 1909）は、早くも兵庫県知事であった 20 代の明治 2 年（1869）1 月に、国家の施政方針として「国是綱目」を朝廷に建白し、「全国ノ人民ヲシテ世界万国ノ学術ニ達セシメ、天然ノ智識ヲ拡充セシム可シ」と述べて、「府藩県ヨリ郡村ニイタル迄小学校ヲ設ケ、各大学校ノ規則ヲ奉ジ、都城辺僻ニ論ナク、人々ヲシテ智識明亮（ちしきめいりょう）タラスム可シ」と、全国に小学校を創設すべきことを提唱していた[45]。また、公卿出身の尊皇攘夷論者で維新政府の重鎮であった岩倉具視（1825 － 1883）は、同じ公卿仲間の国学者である玉松操（1810 － 1872）を腹心として重用して、早くから皇国の学としての国学の復権を企図していた。その岩倉も、すでに明治 2 年 12 月には「宜ク全国大小学校ヲ設ケ彝倫（いりん）ノ道ヲ講明スルヲ以テ根礎ト為スヘシ[46]」と述べ、「彝倫（いりん）ノ道」（人として常に守るべき道）を普及徹底するという皇道主義的な立場から全国規模での小学校教育の実現を説いていたのである。

さらに同じく維新政府の実力者であった木戸孝允（1833 － 1877）もまた、明治元年 12 月、朝廷に建言して「王政維新いまだ一年を出ず、東北の反徒ことごとく其の罪に伏す。今より勉て武政の専圧を解き、内は人民平等の政を施し、外は世界

富強の各国え対峙するの思召」と、戊辰戦後の国家富強の政策遂行を説き、一般人民に対する普通教育、すなわち小学校教育の重要性を説いて次のように述べている。

> 元来国の富強は人民の富強にして、一般人民無識貧弱の境を離るる能はざるときは、王政維新の美名も到底空名に属し、世界富強の各国に対峙するの目的も必ず其の実を失う。付ては一般人民の智識進捗を期し、文明各国の規則を取捨し徐々全国に学校を振興し大に教育を布かせられ候儀、則ち今日の一大急務と存じ奉り候。(47)

実は、上記のような維新政府の首脳たちの、一般人民に対する小学教育（普通教育）の緊要性についての共通認識を踏まえて、維新政府は、明治 2 年 2 月、「小学校ヲ設ル事」という一項を含む「府県施政順序」を制定し、これを全国に布達したわけである。

以上のような維新直後における一般人民の教育を巡る新政府の政策展開を受けて、全国の諸藩は、藩立学校の身分的制限を撤廃する方向での教育改革を断行していった。例えば、信州諏訪の高島藩では明治 2 年に藩校長善館の教育改革を実施して「学校造営ノ儀ハ士族卒平民ノ三等ノ生徒ヲシテ尽ク其智識ヲ広メ其才徳ヲ成サシメ天下国家ノ実用ニ供候趣意ニ候(48)」あるいは「士族ハ勿論卒平民ニ至ル迄日夜勉励致勤学達材成徳シテ御国恩ヲ奉報候様相心得可申事(49)」と入学対象を規定し、平民子弟の入学を許した。徳川御三家の紀州和歌山藩でも、明治 2 年の藩校改革で「生徒貴賤ヲ論セス学事ニ付テハ四民同胞(50)」と身分的制限を撤廃した。さらに、戊辰戦争で幕府軍に加わった志摩鳥羽藩もまた、明治 3 年の学校改革で「士卒ノミ教ルタメノミニアラス農工商ト雖トモ有志ノ者ハ入校ヲ許候(51)」と、従来は藩士子弟に限られていた藩校入学の身分的制限を撤廃し、一般領民の子弟にまで拡大した。

以上のように全国の諸藩は、維新後は藩立学校への入学に関する身分的制限を撤廃し、農工商の平民にまで拡大していった。そのような学校開放の歴史的潮流の中で、長岡藩の国漢学校は新築開校されたのである。当然のことながら、同校もまた、旧来の藩士子弟に限定された身分的制限を撤廃し、藩内領民の全ての子弟にまで学校を開放した。このような、戊辰戦後に虎三郎たち藩首脳が推進した長岡復興に向けての教育的な対応は、維新政府の教育政策に呼応したものであり、新時代の教育的潮流に沿った教育政策の展開であったのである。もちろん長岡藩が、財政破綻の厳しい経済状況の中で、維新政府の教育政策や新時代の潮流に即応した国漢学校を開校できたことは、教育立国主義を掲げる虎三郎の思想的な先駆性や開明性によるものであった、とみることができる。だが、四民平等という近代教育の原理に基づ

く国漢学校の開設を、単に虎三郎個人の功績に帰着させて捉える見方は、明治初期の維新政府を中心とする教育動向を捨象した理解といわざるをえない。美談「米百俵」は、美談である前に歴史的な事実、すなわち史実である。史実「米百俵」が惹起される歴史的経緯を抜きに、美談であるか否かの価値判断をすることはできない。この点こそは、美談「米百俵」を理解する際に留意すべき重要な観点であるといえるのではないか。

廃藩置県と国漢学校の命運

国漢学校に、開校直後の同年8月、校名となった国漢二学の外に医学局と洋学局、それに演武場が急ぎ増設された。これによって、国学、漢学、洋学の三学を兼修する文武両道の教育体制が整えられた。虎三郎が恩師象山の思想「東洋道徳・西洋芸術」を継承して「興学私議」に描いた教育的思想世界－学校教育構想の具体化である。初代校長に就任した虎三郎は、和漢洋の学問を教育内容とする明体達用の教育、文武両道の教育を実施に移そうとしたのである。開校の趣旨を周知徹底すべく藩当局より布達された次の文書は、虎三郎の執筆と思われるが、そこには教育立国主義による郷土復興にかける虎三郎の悲壮な決意を読み取ることができる。

> 目下藩の会計極々窮処（きゅうしょ）には候へ共、文武の義は一日休業候へば、後来藩勢の振興一日の遅延を引起し候次第、従五位様（旧長岡藩第十三代藩主の牧野忠毅（ただかつ））に於ても、此段深く御憂慮在せられ候より、御新禄の内より御出費にて国漢学校建設に相成、来る十五日開校に候條、銘々にも御旨染趣辱相弁へ、艱難中ながら精々出校、奮発勉励、着実研修、其材質を尽し、御奉公の基礎相立候心掛可為肝要者也[52]。

虎三郎たち長岡藩の人々が苦心惨憺の末に創設した国漢学校は、設立の後、間もなくにして大きな転機を迎える。戊辰戦後の長岡藩は、戦前の膨大な借財と戦費の消耗、さらに戦後処分の大幅減禄による藩収入の激減などが相俟って、再建不能なまでの財政破綻に陥った。億二郎たちの維新政府に対する度重なる救済嘆願にもかかわらず、維新政府からは思うような財政支援がえられなかった。その結果、国漢学校が開校式を挙げた数ヶ月の後の明治 3 年（1870）10 月、牧野忠毅（第 13 代藩主）は維新政府に長岡藩知事の辞職願を提出し受理された。これによって、長岡藩は柏崎県に編入され、維新政府の直轄地となったのである。廃藩置県の詔書が発布される前年のことであった。徳川家康の重臣であった初代藩主の牧野忠成が越後長岡に入国してから 250 余年、牧野家長岡藩は、ついに終焉のときを迎えたのである。

当然のことながら、廃藩によって藩立の国漢学校は柏崎県の所管となった。校長

であった虎三郎は、廃藩の翌月の明治 3 年 11 月、柏崎県庁より新たに「学校兼演武場掛」という辞令を受けた。さらに翌 4 年 5 月には、国漢学校は県立柏崎学校の「分校長岡小学校」と改められた。このことは、学校創設に奔走した虎三郎たち長岡藩の人々にとって、アイデンティティの基盤であった長岡藩の終焉を実感させられる衝撃的な出来事であったことは間違いない。彼ら長岡藩の人々は、幾世代にもわたって歴史と伝統のある長岡藩の家臣の家に生まれ育ち、藩の存続発展に身命を賭してきた。彼らにとって長岡藩は忠誠と奉公の全き対象であったといってよい。その長岡藩の消滅は、まさに一大事であった。廃藩置県の直後に、虎三郎は、長岡復興の後事を全て畏友の億二郎に託し、一切の公職を辞して上京する。彼は、再び郷土長岡の土を踏むことはなかった。

おわりに

泥中に咲く蓮華をみるがごとく、絶望の淵にあって希望への光明を描き上げる文豪・山本有三の戯曲「米百俵」は、読む者の心を揺さぶり、感涙を誘う名作である。だが、それは単なるフィクションではなかった。有三は、歴史学者が顔負けするほどに、膨大な関係資料を徹底的に調査・分析する学問的な作業を踏まえて、複雑怪奇な一つの史実を解明し、それを極限にまで純化し美化したのである。彼は、「米百俵」の精神を、主人公の虎三郎をして次のように説かしめている。

> 食わなければ、人間、生きてはゆけない。けれども、自分の食うことばかり考えていたのでは、長岡はいつになってもたちなおらない。貴公らが本当に食えるようにはならないのだ。だからおれは、この百俵の米をもとにして、学校を立てたいのだ。演武場を起こしたいのだ。学校を立て、道場を設けて子どもを仕立てあげてゆきたいのだ。しっかりした人物を養成してゆきたいのだ。この百俵の米は、今でこそただの百俵だが、後年には一万俵になるか、百万俵になるか、はかり知れないものがある。いな、米俵（こめたわら）などでは見積もれない、尊いものになるのだ。その日ぐらしでは、長岡は立ちあがれない。新しい日本は生まれないぞ。(53)

有三が戯曲『米百俵』に描いた虎三郎の教育立国主義の世界は、たしかに感動的な美談であった。その物語は、明治維新という時代の転換期に勃発した戦争の悲劇から生まれたものである。だが、その「米百俵」の物語を、美談である前に、史実

として捉えた場合、一体、どのようにみえてくるのか。一つの史実が惹起される背後には、その時代に特有の様々な歴史的要因が複雑に絡み合って存在する。史実「米百俵」にも歴史的な要因や経緯がある。それ故に本稿は、美談「米百俵」を史実という歴史学的な視座から捉え、その歴史的な経緯や背景を分析してきたわけである。考察の結果、次の事実を指摘することができる。

(1) 維新の夜明けに勃発した戊辰戦争の結果、維新政府軍に抗した越後長岡藩は惨敗した。無条件降伏の後、7万4千石を領有する長岡藩の城下町は灰燼と帰し、藩士家族や領民は、衣食住の生活に窮した。長岡復興を委ねられた象山門下の虎三郎は、同門畏友の三島億二郎と共に様々な復興政策を展開していく。が、象山の学問思想を継承した彼らは、儒学の説く教育立国主義を掲げて、人材育成の教育を重視し、急ぎ藩立学校を再開する。さらに財政難の中で校舎を新築し、差別なく全ての領民子弟が学べる四民平等の藩立学校－国漢学校を開校させた。

(2) 国漢学校の校舎が落慶する直前に、長岡藩牧野家の分家にあたる越後三根山藩（新潟市）から救援米「米百俵」が送られてくる。虎三郎は、救援米である「米百俵」を飢えに苦しむ藩士子弟に分配せず、これを元手に国漢学校を新築した。従来は、そう理解されてきた。美談「米百俵」の誕生である。

(3) だが、事実はそうではなかた。虎三郎が、戦後間もなくに、万難を排して藩立学校を再開し、さらに財政危機の中で新たな藩立学校の校舎を新築し、領民子弟に開かれた国漢学校を開校したのは、そうせざるをえない理由があったからである。すなわち、富国強兵を急ぐ維新政府の基本政策の一つに、国民皆学を旨とする全国ネットでの学校教育の実現があった。虎三郎たち新生長岡藩の首脳たちは、この維新政府の御意向を真摯に受け止め、学校教育を再開し、万難を排して四民平等の国漢学校を開設しなければならなかったのである。

たしかに結果的には、史実「米百俵」の誕生は、虎三郎の教育立国主義による長岡復興という夢の実現に繋がった。が、その歴史的な本質は、逆賊となった長岡藩が、忠誠の証として維新政府の求める教育政策を誠実に履行することにあった。決して虎三郎個人の勇気ある英断で誕生した美談ではなかった。本稿は、この歴史的な事実を解明したかったのである。歴史は、一人の英雄によって創造されるほど単純なものではない、ということである。

(4) 虎三郎たちが、必死の思いで新築開校した国漢学校は、校名が示す通り旧来の儒教一辺倒の漢学教育ではなく、新たに国学を取り入れて、国漢両学を兼修する新しい学校であった。それは国学を重視する維新政府の教育政策を

体現したものであった。また、旧来の藩校が支配階層の武家の子弟に入学を限定していたのを、全ての領民子弟が学べる開かれた学校として国漢学校を開校したのも、四民平等の国民皆学を掲げる維新政府の教育政策を忠実に履行することに他ならなかった。決して虎三郎個人の先駆性ではなかった。これらの諸点を明らかにすることもまた、従来の国漢学校の理解に疑問を抱いていた筆者が、本稿で解明すべき研究課題としたところである。

(5) 以上に指摘した諸点は、従来の「米百俵」の理解に反する、というよりは覆すことになる。越後長岡を舞台とした「米百俵」の物語は、美談である前に厳粛な歴史的事実、すなわち史実である。このような歴史理解の本質的な視座から、「米百俵」の誕生経緯とその内実を吟味してみると、従来の解釈とは全く違った意味で、「米百俵」の史実は「美談」に値する歴史的な出来事であった、と再認識することができる。すなわち、三根山藩から送られた「米百俵」は、教育立国主義を掲げる虎三郎と彼の盟友たちによって、経済的な価値をはるかに凌ぐ精神的な価値を生み出した、ということである。学校の新築資金の全体からみれば、「米百俵」の代金は微々たる金額であった。だが、今日(きょう)の飢えを忍んで明日(あす)への希望に生きる決意の象徴として、学校開設資金に組み込まれた。そして、この決断と実行とが、戦後長岡の復興への起爆剤となった。衣食住という生きるための最低条件を奪われてもなお、物心両面で窮地に立つ人間は、歴史の連続性から断絶した「今」という現実に埋没せず、孫子(まごこ)の世代に連続する教育的世界を遠望して生きられる、尊厳にみちた偉大なる存在である。それ故に、「米百俵」という史実は、「美談」と呼ぶに値する。

以上、美談「米百俵」の誕生経緯とその内実を、史実としての視点から吟味してきた。明治維新という大きな時代の転換期に、越後長岡で誕生した「米百俵」の美談は、国是ともいうべき維新政府の御意向に逆らえず、財政破綻にあった逆賊の長岡藩が、他事を投げ打て遵守した教育政策の賜物であった。そこには、明治維新という転換期の時代思潮を読み違えず、しかも維新政府の権力に抗うことなく、長岡という地域住民の安寧を求めて、ひたすらに学校開設による人材育成という最も平和的な手法で、戦後復興に立ち向かった「小林虎三郎」という英明にして篤実な人物がいた。

その彼が、同門畏友の億二郎たち長岡の人々と共に、戦後の悲惨な郷土長岡の復興にかけた思いが、「米百俵」の史実を生み出した。その意味で、矢張り「米百俵」は美談に値するといえる。このような美談は、決して越後長岡にのみ起こりうる奇跡的な出来事ではなく、維新期の日本の遠近で起こりえた美談であったとみる

ことができる。実は、そこにこそ、史実「米百俵」が、地域的な特殊性を超えて美談として認知されるに足りる普遍的価値を内在した歴史的な出来事であった、とみることができるのである。

【注】

(1) 今泉省三『三島億二郎伝』(覚張書店、1957年)、55頁。

(2) 同上、『三島億二郎伝』、58－59頁。大参事の任命を受けた億二郎の日記には、藩治職制の改革が維新政府の方針によって断行されたこと、それ故に辞令は維新政府より公布されたこと、等々の経緯が詳述されている。

(3) 虎三郎は、江戸遊学中の象山塾時代に、米艦の浦賀来航という歴史的な大事件に遭遇し、師説の横浜開港策を奉じて藩主や幕府に献策した。その結果、謹慎処分を受ける羽目となった。彼は、越後長岡に帰藩した後の安政6年(1859)春、悪戦苦闘の末に処女論文「興学私議」を書き上げ、恩師象山に送り届けた。同論文は、恩師象山の説く儒学の教育立国思想を、幕末期日本の危機的な時代状況の中で解釈し具体化した、国民皆学を基本とする近代的な学校教育論であった。

(4) 坂本保富『米百俵の歴史学』(学文社、2006 年)。本書は、虎三郎没後の明治以降、平成に至る間の先行研究を整理分析する作業を通じて、山本有三をはじめとする先人たちの、美談としての「米百俵」の理解の問題点を明らかにし、主人公である象山門人・小林虎三郎の教育的軌跡の全体を、日本近代化過程の中で理解し位置づけようとする新たな観点から試みた研究成果である。

なお、筆者の上述のような観点から執筆した「米百俵」の思想的世界の全体像を開明する研究成果(連載「日本近代化と「米百俵」の主人公・小林虎三郎の教育的軌跡」)で、すでに公刊されたものとしては、信州大学全学教育機構・坂本保富研究室「研究報告書」第 6 号所収の論文「漢書『大徳国学校論略』の明治日本への翻刻紹介」、第 7 号所収の論文「明治初期における欧米翻訳教育書の校訂活動」などがある。

(5) 今泉省三『長岡の歴史』第6巻(野島出版、1972年)、227頁。同書には、長岡藩校崇徳館の校名の出典に関する諸説の記述があり、これを参照した。

(6) 笠井助治『近世藩校の総合的研究』(吉川弘文館、1960年)、1－2頁。

(7) 同上、『近世藩校の総合的研究』、2頁。

(8) 長岡藩校の設立経緯については、『長岡市史』(長岡市)の「通史編上巻」(1

994年）、609－610頁を参照。

（9）文部省編『日本教育史資料　二』（臨川書店の複製版、1965年。初版は1890－1982年にかけて冨山房から出版）所収の「旧長岡藩」（同書、306丁）より引用。

なお、引用文中に紹介された伊藤満蔵（東嶽（とうがく）、1820－1869）は、長岡藩の家臣深津家の出身で藩儒である伊藤東岸の養子となり、京都の漢学塾古義堂に遊学し伊藤東峰に師事して伊藤仁斉学派の儒学（古義学）を研鑽した。その後は、江戸藩校の教授、藩主嗣子の待講などを経て、郷里の長岡藩校崇徳館の都講に就任、藩士子弟に古義学派の儒学を教授した。また、資料の中に伊藤と共に併記された秋山多門太（徂徠派）とは、秋山景山（1758－1839）のことである。彼は、60石という軽輩の家に生まれながらも頭脳明晰、江戸勤番の折に荻生徂徠の門人服部南郭（なんかく）の養子で後継者の服部真蔵（仲英）に師事、徂徠学を学ぶ。文化5年の藩校崇徳館の創建時には教授に抜擢され、同12年には都講に就任した。以来、21年の長きに亘って都講を務め、藩校の基礎作りと発展に尽力した。以上は、今泉省三『長岡の歴史』第6巻（野島出版、1972年）、『長岡歴史事典』（長岡市、2004年）その他を参照。

（10）同上、文部省編『日本教育史資料 二』所収の「旧長岡藩」、306丁。

（11）同上、文部省編『日本教育史資料 二』所収の「旧長岡藩」、306丁。

（12）北越新報社編『長岡教育史料』（1917年）に所収の「藩政時代の教育　槙真一氏談」（同書、2－3頁）。

（13）前掲、文部省編『日本教育史資料　二』に所収の「旧長岡藩」、306－307丁。

（14）前掲、今泉省三『長岡の歴史』第6巻、239頁。

（15）前掲、北越新報社編『長岡教育史料』、13頁。

（16）文部省内教育史編纂会編修『明治以降教育制度発達史』第1巻（龍吟社、1938年）、87頁。

（17）同上、『明治以降教育制度発達史』第1巻、232頁。

（18）明治維新政府は、旧幕府の領地と戊辰戦争で朝敵となった諸藩の領地を没収して政府直轄地とし、府あるいは県として直接統治した。他の全国諸藩は従来通り存続が許されたので、維新政府の「藩府県」という地方統治の制度は、明治4年（1871）7月の廃藩置県まで続いた（「日本近代思想体系」第6巻『教育の体系』、岩波書店、1990年、12頁の欄外注記を参照）。

（19）前掲、『明治以降教育制度発達史』第1巻、230頁。

（20）同上、『明治以降教育制度発達史』第1巻、230頁。

（21）同上、『明治以降教育制度発達史』第1巻、232頁。

（22）前掲、『長岡市史　資料編4　近代一』、298頁。

（23）稲川明雄『藩物語シリーズ　長岡藩』（現代書館、2004 年）、177 頁を参照。
（24）西郷葆「国漢学校と小学校」（北越新報社『長岡教育史料』所収、1917 年）、同書 12 － 13 頁。
（25）『長岡市史』の「資料編3　近世二」（1994年）、862頁。
（26）同上、『長岡市史　資料編 3　近世二』、862 頁。
（27）同上、『長岡市史　資料編 3　近世二』、867 頁の資料解説。この基になったのは、今泉省三『忘却の残塁－明治維新の三傑－』における「当時、米一斗七、八升で金一両の相場である。四斗七升いれ百俵でおよそ二百七十両余になる」（同書 142 頁）という記述と思われる。なお、同氏の『長岡の歴史』第 6 巻（野島出版、1973 年、240 頁）にも、「米百俵」の換金額に関する同様の記述が認められる。
（28）同上、『長岡市史　資料編 3　近世二』、862 頁。
（29）同上、『長岡市史　資料編 3　近世二』、862 頁。
（30）前掲、『長岡市史　通史編　上巻』、774 頁。
（31）前掲、今泉省三『長岡の歴史』第 6 巻、240 頁。
（32）前掲、『長岡市史　資料編 3　近世二』、862 頁。
（33）三島億二郎日記「満んとこ路日ことの記」（今泉省三『三島億二郎』、85 頁）。
（34）今泉省三『忘却の残塁－明治維新の長岡の三傑－』（野島出版、1971 年）、142 － 143 頁。
（55）前掲、『長岡教育史料』に収載の国漢学校教員、西郷葆の談話、同書 14 頁。この史料が前掲『長岡市史　資料編 3　近世二』（862 頁）に転載されている。
（36）藩校時代に入学して、戊辰戦後の新生国漢学校の創立式典にも生徒として列席した渡辺廉吉（1854 － 1925、初代総理大臣伊藤博文の書記官を経て、行政裁判所評定官などを歴任し貴族院議員）の証言（同上、『長岡教育史料』、11 頁）。
（37）前掲、『明治以降教育制度発達史』第 1 巻、88 頁。
（38）前掲、『日本近代教育百年史』第 3 巻、448 頁。
（39）前掲、『明治以降教育制度発達史』第 1 巻、95 頁。
（40）同上、『明治以降教育制度発達史』第 1 巻、95 頁。
（41）同上、『明治以降教育制度発達史』第 1 巻、99 頁。
（42）前掲、『日本近代教育百年史』第 3 巻、447 － 448 頁を参照。同書には、幕末維新期には全国諸藩において国学関係の教育が急速に浸透拡大していく状況が次のごとように記されている

国学、皇学、和学は、早くは嘉永（金沢藩）・安政（福山藩）に国学校が設置され、あるいは独立学科がおかれて教授されたが、「維新後別二和学校設置ノ制」（前橋藩）がとられたとか「維新ノ後之ヲ設ク」（館林藩）とかのように、明治二年（旧暦）以後の藩制、学制の改革によって設けられるのが一般的であった。皇学所・国学校をおいたり、その科目をおいた藩校は、およそ三分の一であった。

学校、科目として皇学を採用することはなかったが、使用すべき教科書として日本書紀・神皇正統記などの書名を挙げる藩は多い。しかし皇学に対する理解は十分ではなく、「平田本居ノ著書ヲ授読シ且ツ講義セシム」（苗木藩）のような本格的な教授もあったが、「皇国普通ノ字ヲ以書スルモノヲ皇学トス国学支那学翻訳洋書等ナリ」（米沢藩）と解釈するものもあったのである。

旧藩校においては学神の祭儀は恒例の行事であったが、維新期になって釈典を廃止あるいは停止することがあった。　（同書、447 － 448 頁）

（43）渡邊廉吉氏談話「崇徳館と国漢学校」（前掲、『長岡教育資料』所収、9－10頁）。

（44）松本健一『われに万古の心あり』（新潮社、1992 年）、214 － 215 頁。

（45）伊藤博文「国是綱目」（岩波書店「日本近代思想体系」第 6 巻所収、同書 12頁）。

（46）宮内省編『岩倉具視実記』中巻、602 頁。

（47）木戸孝允「普通教育の振興につき建言書案」、前掲「日本近代思想体系」第6 巻所収、同書 3 頁。

（48）『長野県教育史』第 7 巻「資料編一」（1972 年）、314 頁。

（49）同上、『長野県教育史』第 7 巻「資料編一」、317 頁。

（50）前掲、『日本近代教育百年史』第 3 巻、445 頁。

（51）同上、『日本近代教育百年史』第 3 巻、445 頁。

（52）前掲、『長岡市史　資料編 3　近世二』、862 頁。

（53）山本有三『米百俵』（新潮社、1943 年）、100 頁。